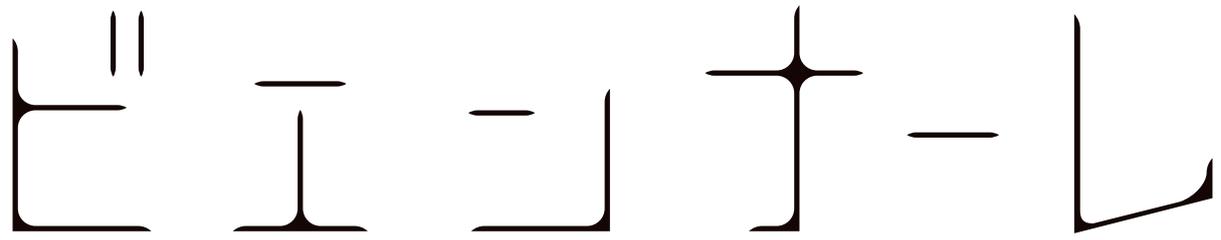


# 鳥屋

S E N - O K U

2 0 2 1



Re-sonation 鳥屋の聲

2021 9/11 sat. - 12/12 sun.

月曜日 (9月20日は開館)、9月21日、10月25日 - 11月5日は休館

[会場] 青銅器館 第4展示室

[開館時間] 10時 - 17時 (最終入館は16時30分) [入館料] 大人 800円、高大生 600円、中学生以下無料

[主催] 公益財団法人泉屋博古館、住友グループ各社、京都新聞

## 展示リスト

\*招待出展作家は五十音順、作品は今回の展覧会に合わせて制作されたインスピレーション作品、各作家の旧作の順に記載し、それぞれの作品名・サイズ (H)・制作年を付記した。  
\*インスピレーション作品にはイメージ元の古代青銅器を付記し、制作にあたっての作家のコメントを《作家の聲》として掲載した。

### 梶浦聖子

KAJIURA Seiko

#### インスピレーション作品

5

双鳥寛ぎの盃

12.7cm

2021

イメージ元：戈盃

#### 《作家の聲》

背中合わせに一体となった動物の形態は印象的で、見るものに「なぜ？」という不思議な感情を呼び起こす。でも、過去にそういう作品を作った私にとってはごく自然に、そうあるものとして受け入れられた。形が具体的な分、余計に「なぜ？」と思うかも知れないけれど、他の形と変わりはない。デザインとしては、顔が2つある方が表情を作りやすく面白いし、何か不思議な雰囲気になるところがいい。古代に青銅器を作った人とも通じ合えた気持ちがあった。この青銅器は、ワックスで作った鳥の原型を複製して、背中合わせに繋いでから鋳造した。制作中にインドネシア語の「Gotong Royong」(日本語で「相互扶助」)という言葉が思い浮かんで、その言葉を鳥の胸に刻んだが、鋳肌が荒れて消えてしまった。タイトルは「相互扶助」ではなかったようだ。それ

ならば「双鳥の体操」にしようかと思って、出来上がった鋳物を眺めていたら、二羽とも体操をしていなかった。ただ寛いでいた。

6

万物層累聖獣盃

79.5cm

2021

イメージ元：竊曲文四足盃

#### 《作家の聲》

青銅器を前にして、これを作った古代の人のこと、越えて来た時間の長さのことを考えた時、身震いするくらいに広い世界に迷い込んだ気がした。自分が創造する対処として青銅器を見てみると、そこには時空を超えて、全ての要素、たとえば人類の歴史、技術や素材について、その時代の文化や信仰、あらゆる生きとし生けるものが内包されていると感じた。そのいろいろな要素を抽出・分解して、いま、この日本に生きる私が再構成することで、今回の展覧会の答えとなる作品が出来るのではないかと考えた。頭の中でたくさんの生き物たちが姿を現しては、あれよ、あれよと言う間に、あちこちに消えていってしまうので、捉えた形を急いで集めて上に積んだ。膨大な時空を越えてやって来た器は形の実体を失いつつあり、その印象だけが漂っている。印象の層に

はいろいろな沈殿物があり、累積され、また次の時代が来るのを待っている。

15

失敗と成功

38.4cm

2019

16

失敗と成功 ベチヤンコ

39.6cm

2019

### 城戸万里子

KIDO Mariko

#### インスピレーション作品

10

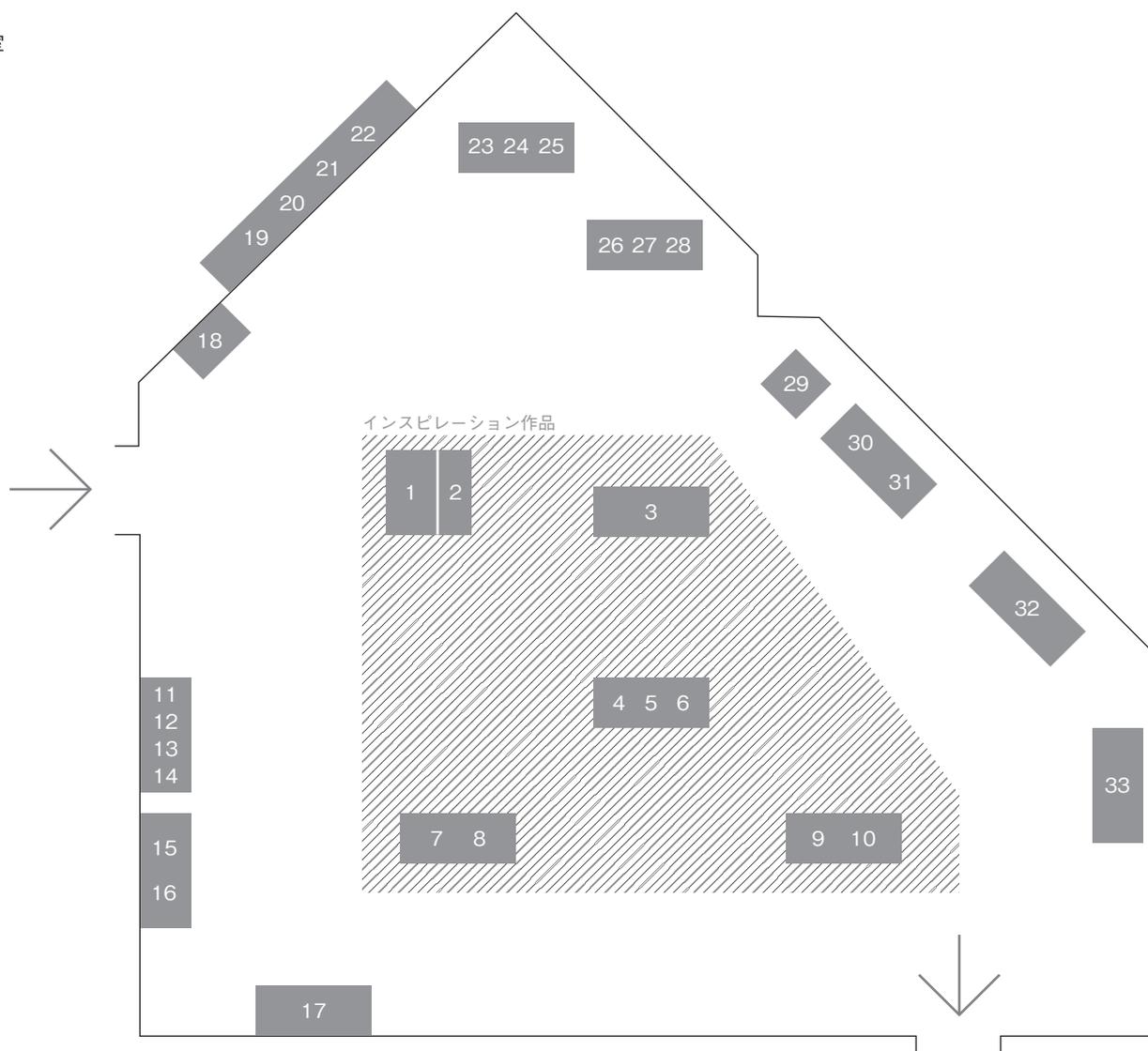
依りどころ

40.0cm

2021

#### 《作家の聲》

私は青銅器に言葉を失ってしまったような、物言わ



ぬ空っぽな雰囲気を感じます。かつてはそこに人の祈りや願い、想いなどの精神性が強く込められ、依りどころとして一体となっていたはずですが、それは変化してなくなり、物体としてだけ残されてしまっています。精緻な文様には迫力がありますが、今に生きる私はそこに込められていた精神性を想像し、推測するしかありません。しかし一方で、鑄造は現在に受け継がれてきた技術であり、遠い昔の人と今の私は繋がっているということも意識させます。また、はっきりとした主張がない、あるいはわからないからこそ、感情移入できることもあります。空っぽで少し寂しい感じもするけれど、確かに繋がっている誰かの存在を感じられる。そんな距離感のイメージを、私自身の依りどころと言える身近にある花と花器に置き換えました。

33  
ベチュニア  
47.2 - 50.3cm  
2018

見目未果  
KENMOKU Mika

インスピレーション作品

8  
ほねを 入れる ための ようき  
60.0cm  
2021

イメージ元：蜻蛉文

《作家の聲》

たくさんの美しい青銅器は祖先神にお供えをするための祭器だと聞いた。表面を覆い尽くす文様は、一族の繁栄を願う祈りを、まじないみたいに容器の中に封じ込めているみたいに見えた。私が彼らと同じときに生きていたら何を作るだろう。人が生まれて、生きて、死んで、祖先につながっていく。生きてきた体〈骨〉をいれる器を作ろうと思った。思いのこもった文様は立ち昇ってひろがり、なくなっていく、というイメージで制作した。

17  
chord  
32.0cm  
2019

佐治真理子  
SAJI Mariko

インスピレーション作品

1  
きいてみたいこと ～ Who are you ?～  
37.6cm  
2021

イメージ元：饗饗文韻、鴟鵂占、丁冉占

《作家の聲》

古代において、流行であった「饗饗文」は邪悪な悪霊をくらいつくすものとして天の最高神とも言われる文様でした。饗饗の文様には人々の願いや思いが詰まっていたことでしょうか。古代人はどんな人だったのか。どんな願いや希望を持って生きていたのか。問いかけをしながら、饗饗の面を被った古代の名もなき人を制作しました。好きな人はいる？ 貴方にとって怖いものは？ 最近嬉しかったことは？ 3000年後の人の生活はどうなっていると思う？ 歌は歌う？ 彼らからどんな答えが返ってくるだろう。

11  
ドレスアップ#ドット  
42.0cm  
2021

12  
ドレスアップ#ガウン  
42.0cm  
2021

13  
ドレスアップ#クラウン  
42.0cm  
2021

14  
Golden Apple  
45.0cm  
2018

巽 水幸  
TATSUMI Miyuki

#### インスピレーション作品

3  
ふりつもることのかけら  
28.0cm  
2021

イメージ元：夔神鼓

#### 《作家の聲》

青銅器と静かに対峙する間、何かを読み取ろうとする私の好奇心は時空を超えてその時代に飛び込むような体験をした。乾いた空気と土埃の粒子、暗くて低い広大な空、人々のうごめく影、馬のたてがみ、水瓶のしずく、炎の明るさと熱。過ぎ去った過去であるはずの場所が活気にあふれている。私が迷い込んだ古代の絵巻のような風景を現在に引き寄せることを制作の序章とする。彼らは青銅という朽ちない材質に金文を刻んで一族の偉業や由緒を子孫永代まで伝える役割を担わせた。一族の血脈が家族を増やしながらかついでに繋がり広がって行く様は、枝葉を伸ばして成長する大樹のようであり、一族ごとに決まった土地に定住することも、木が根付いた場から動かないことを彷彿とさせる。私の目の前に陽炎のように大樹が浮かび上がった。大地に采譜を背負った大樹が根を張り、そこで通り過ぎる全てを飲み込みながら風に揺らぎ、やがて月を飲み込むほどの悠遠の時間を通り過ぎていく。私の選んだ音の鳴る2つの青銅器は、今も昔も同じ音が鳴るだろうか？音はいつだって大気をふるわせて消えていくばかりで跡形もない。ヒトの話し声も、日常に溢れるありとあらゆる音はその刹那に消えていく。種が宿り、混じり合い、やがて小さな花片が次から次へと枝を覆い尽くし、風に吹かれるように空を舞い、静かに大地に降り積もる。今まで、私は大地がそうして作られてきたことに無頓着であった。土の中から現れるのは、花片に埋葬された歴史である。今日溶

かした青銅には、鴨川の河川敷の石を与えることにした。石を抱きかかえるようにうずくまる鳥がこれからの音を聞いていく。

26  
往復書簡  
22.0cm  
2021

27  
みかづきと話す  
13.5cm  
2019

28  
雨上がり  
16.4cm  
2019

中西紗和  
NAKANISHI Sawa

#### インスピレーション作品

4  
楽園  
20.6cm  
2021

イメージ元：螭文方炉

#### 《作家の聲》

「螭文方炉」は建物に窓と門扉があり内部空間を見せる造りになっており、何も無い自由な空間を舞台にしているところが魅力的である。また、良く見ると門番がふたり、炉を支える虎が四頭、龍のような獣など、これらが実際の大きさの比率を縮尺したサイズ感になっており、そのスケールが違和感なく作品の世界観に入り込める要因であると感じた。ほかの青銅器では縮尺が自在に混ざりながら情報が凝縮されることで幻想的な印象を受ける一方で、スケールを合わせるだけで一気に人間の生活に身近な存在に感じられるのがこの作品の妙味である。おそらくこの二つの要素は私が子供のころの遊び（シルバニアファミリー、レゴブロックなど）を想起させ、それ故にこの作品を見ていて胸が高鳴るのだと思う。もしかしたらこの螭文方炉でも春秋時代の誰かがごっこ遊びをしていたかもしれない…と想像すると尚更惹きつけられた。私はまず方炉の空っぽの内部空間を窓から覗き見る。そのスペースに椅子を置いて…食卓を置いて…この辺りで寝て…もしこの建物が生活したらというイメージをした。そしてこの建物が朽ちていくところを想像した。ふとそのとき、見張り役の門番や威嚇しながら下支えをしている虎、四つ角にしがみ付いて四方八方に睨みを利かせている獣はどうしているだろうと考えた。建物が消滅した跡の世界に思いを巡らせ、門番や虎や獣たちが「守ること」「支えること」「見張ること」というそれぞれが任されてきた役割から解放され、肩の荷を下ろして安らげる空間をつくらう、と決めて今回

の作品に取り掛かった。座り通しだった門番はふたりにて手を取りながら走り、すべてを支えていた虎はリラックスして寛ぎ、獣は地上と樹の上を行ったり来たり。螭文方炉では目線が合うことのなかった者たちが自分以外の存在に気が付き共存している空間を創出した。

32  
in-ner-  
30.0cm  
2008 - 2021

平戸香葉  
HIRATO Kana

#### インスピレーション作品

9  
夜霧の月  
22.0cm  
2021

イメージ元：金文「監」

#### 《作家の聲》

古代青銅器における「用」の持つ造形の自由さ 古代青銅器を見る楽しさについて—— 今回の作品は、泉屋博古館の中国の青銅鏡という小南一郎さんの文章にあった、「新石器時代から春秋前期、人々は己の姿を映すために、多くの場合水鏡を用いていたのだと推測される」という文章から着想を得た。容器に水を張りそこに顔を映したのであれば、器状のものであればなんでも鏡として使えたということだな、というところから制作に至った。月は自分の姿ではなく心を映し出す鏡であり、真実は常に見えづらいものである、という想いから夜霧の月というタイトルをつけた。存在する形の中に必要とされる「用」の要素があれば、それをどう使うかは使う人の自由。そしてどう作るかは製作者の自由である、ということ思いながら制作した。『つかう』ことも『つくる』ことも、もっと自由でいいんじゃない？古代青銅器にそう言われた気がしたのだ。古代青銅器を見て思うのは、そのほとんどが「用」を持つ形であるということだ。昔の人たちの生活の中での「用」であるので、現代の生活様式の中では一見してその用途を想像できないものも多数あり、そういうことを考えながら見るととても興味深い面白い。そして私が古代青銅器を見て刺激的に感じるのは「用」を持つ造形の自由さである。私たちは普段自分が使うものを選ぶ時、例えば食器だったら洗いやすいか、重すぎないかと無意識に考えて選んでいると思う。それは私の場合選ぶだけでなく自分で作る時も同様で、『使いやすさ』をととても意識してものを作り出している。対して古代青銅器はどうだろう。酒を注ぐ器と言われているジコウと呼ばれる青銅器があるが、一見では怪獣の置物にしか見えない。しかし取手のようなものがついているので、おそらく何かに使うものなのだろうと考えられる。『酒を注ぐ』という最終目的の為には明らかに過剰すぎる造形と加飾。持ってみたことがないのでわからないが、装飾もふんだんにあしらわれているので、多分金属総量から推察するに結構な重さだろう。酒

を入れたらさらに重みも増す。なんだかいろんなことを想像してしまう。絶対に自分で持って器に注ぐ想定でつくられていない、やっぱり自分で注ぐのではなく奴隷ありきの器なのかな。奴隷じゃなくて給仕か。この時代って奴隷とか給仕とか、どういう階級制度？というか、パーティーのような場所使っているのかな。普段使いいわけないわな。え、じゃあもししたら酒は大体怪獣に入ってるよ〜って、皆にわかりやすくするため、とか？そんな目的ってある？こんなふうに一点一点に想いを馳せるとあっという間に時間が過ぎていく。そうして昔の人々の暮らしに想いを馳せるのは、とても楽しくて豊かな時間である。知識が伴わない私の場合、そのほとんどが上記のような勝手な妄想になるのですが。知識の力を借りたいと思ったら、展示に合わせてさまざまな青銅器の説明文も置いてあって、とても勉強になる。でも、答えを知らないから楽しいってこともありますよね。そんなこんなで気がついたら余裕で半日が過ぎていく、恐るべき楽しい泉屋博古館なのだ。

29

揺れ動く輪郭

130.0cm

2010

30

雨月

15.0cm

2021

31

種

22.0cm

2019

三上 想

MIKAMI Sou

インスピレーション作品

2

鳥の青銅花器と繋ぐ花

36.8cm

2021

イメージ元：鴟鴞尊

《作家の聲》

この展示のお話をいただいた時点で、古代青銅器の作品群には、当時と今の時代の移り変わりによる大きな感覚の違いを感じ、まずは気の遠くなる思いがした。しかし、当時の作り手に想いを馳せているうち、今の時代の私でも共感出来る部分を見つけることも出来た。鑄造の技法は、こんなに時間が経っても基本的な部分は変わらない。当時の職人達と今の自分とでも共通に出来る話題が沢山あるはずで、数千年前の人と共感し合えることがあるかもしれないと考えると、驚きもあり、とても刺激的に思えた。そして、古代青銅器の作品群の中にも共感できるものがあつた。動物を象った器物である。私の作品制

作の根っこには以前から「動植物を主体とした作品作りをしたい」という気持ち強い。単純に作ることで生き物が好きなことがその理由でもあるが、人の生活様式となると、どうも自然を遠ざけた造りになりがちなため、「好きな動植物を部屋の見える所に置きたい」。そして「眺めたり使ったりしながら、何かしら娯楽を感じられるもの」を作りたいと日々考えている。動物を象った古代青銅器には、勝手ながら古代の人へのシンパシーを強く感じた。古代の動物好きな人によるアイデアで生まれた器物なのかもしれない。動物形の器で生活の一場面をより楽しんだのかもしれない。そうだとしたらその気持ちはよく分かり、あなたもですか、と少し嬉しい。では、今の私だったら、動物型の青銅器をどんな風に今の生活に取り入れたいだろうか？古代青銅器は当時の貴族のものであつたけれど、平凡な一般家庭で育つた私の、庶民的かつ個人的な感覚で制作してみたくなり、出来上がったのが今作品である。今回は鳥であるが、形が思いつけばどんな生き物でも良く、「生き物に植物を生ける」と言う点が大事だ。生き物に植物が合わさることでより華やかで楽しいものになり、花器の生き物もより嬉しそうになる。植物の生け方は、その都度あれこれと自由に楽しみたい。今回の作品の「繋ぐ花」は、そう言った気持ちも込めて、生花ではできない生け方を試し、造形を楽しんでみることにした。実際の生花をそれぞれの花器で生けてみても、思わぬ表情が沢山見えてくるのだろうと思うと、色々試すことが楽しみな作品となった。当時の職人や貴族はこの作品を見てどう思うだろうか。全くのへなちょこに思われるかもしれない。古代青銅器の流行がなければ今の私も鑄造をしていないのだろうし、時代だけが進んで、私個人の技術面では当時に劣っているとも感じた。そして、数千年前の当時は一部の特別な人々しか目にする事の出来なかったものを、今となっては一庶民が、個人の自由で好きなものを作り楽しむことが出来るようになった、現代の環境のありがたみを再確認できた制作期間だった。

23

アネモネ

24.5cm

2014

24

団栗

15.7cm

2013

25

ナガミノヒナゲシ

25.0cm

2014

山下真守美

YAMASHITA Masumi

インスピレーション作品

7

夜の集

2021

イメージ元：鴟鴞尊

《作家の聲》

ひとり森を歩くと 山の主の存在を感じる 生き物に出会う 眼と目があう 息をのむ—— 鴟鴞尊は中国、商後期の青銅の酒器で鳥獣を模した鳥獣尊のなかでもミミズク（しきょう）を象った酒器（そん）である。ミミズクは時代や地域により変容する象徴を持ち、この時代は悪霊の跋扈する夜間に宗廟などを守護する存在とみなされており、青銅器や玉器のモチーフとして広く使われてきた。今回の作品のモチーフをミミズクに選定したのは、日頃より山歩きをする中で一度だけ出会ったことがある、その独特の眼の存在感に引き寄せられたからである。悪霊の存在を失った現代の仮想的な暮らしの中では聞を感じることもなく、人間が自然の一部であるという感覚すら忘れ去られている。かつて、鴟鴞尊は祭事における酒器の役割を果たしてきたが今回、今の暮らしにおける役割を再構築として、夜に集い山の主として我々に畏敬の念を抱かせる自然の象徴として、森の生きものを纏い造形を試みた。—— ひとり森を歩くと 静寂の声がきこえる ミミズクと森に生きるもの 月と光と森の影 夜の集がはじまる

18

十人十音

4.0-7.5cm

2008 - 2018

19

すこしずつのぼる

10.0-15.0cm

2018

20

おはこびうま

5.0cm

2021

21

しまのこ

2.7-5.3cm

2011

22

きおくのりんかくせん

7.0-15.5cm

2018 - 2021